

31. 各臓器における CT と RI 断層像について

杉本 東一 勝山 直文
 川上 憲司 多田 信平
 望月 幸夫
 (慈大・放)

脳、肝、腎疾患を対象として CT (ACTA) と RI 断層 (PHO/CON) 像について、その診断能及び疾患別によるそれぞれの特異性等について比較検討した。対象は、ほぼ同一時期に脳、肝、腎の CT 及び RI 断層を併用した 149 例である。この内、脳疾患 124 例、肝、腎疾患 24 例である。結果：①脳の血管性病変の follow up および、転移巣の検索には RI 断層が優先すると考えられる。②脳内深部病巣に対しては CT が有利である。③腹部臓器 (肝、腎) の腫瘍に対しては CT ではエンハンスメント効果が著明でなく、種々のアーティファクトのため診断が困難であるがタイムス断層では腫瘍シンチとの併用により、さらに有利である。④RI の集積の乏しい肝、腎の囊腫性病変でも CT では詳細な情報が得られる。

32. 'CT と RI cisternography

西川 潤一 前原 忠行
 八代 直文 田坂 眞
 (東大・放)

目的：RI cisternography で、典型的な NPH の所見を呈した症例とそれ以外のものの CT 像についての検討。

対象：臨床的に NPH を疑われ、CT および RI cisternography の両検査が行なわれた。22 例中、V-P shunt を挿入した症例、incomplete study を除いた 18 例。

方法：CT 像で、側脳室の frontal および、temporal horn, cortical sulci, sylvian cistern. その他の cistern に注目し、frontal horn に関しては、bifrontal および bicaudate diameter を用い cerebroventricular index (F.J. Y. HAHN) により百分率で、他のものは、拡大 (+), はっきりしない

(-)。それ以外のもの (±)、に分類し、RI cisternography の所見と比較した。

結果：症例数が少なく、はっきりした診断基準は、引き出せなかつたが RI cisternography で典型的な NPH の所見を呈する症例では、CT 像上、側脳室、特に temporal horn の拡大がみられ、cortical sulci, cistern の中は正常より狭い傾向がみられた。

宮前 (埼医大・放) より濃度と拡大の相関について質問があったが、未検討であり、特に意見はないが、全例共 48 時間後に側脳室に RI が残っており、parasagittal area に activity はなかった。

33. 放射性同位元素を用いた V-P シャント交通性テストについて

船井 洋光 福田 隆
 (虎の門病院・放)
 相羽 正
 (同・脳外科)
 山崎総四郎
 (東京女子医大・放)

RI シャント交通性テストを紹介し考察した。

対象：1971 年 4 月以降虎の門病院で行なった 103 例を使用した。検査方法：原則として先ず 99m Tc-pertechnetate 1 ~ 2 mCi を Reservoir 内へ経皮的に注入し、頭部、腹部の撮影後 Flushing device を pumping して移行を観察した。結果：代表例として通過良好例、脳室側完全閉塞例、腹腔側完全閉塞例、腹腔側不完全閉塞例、拡散障害例を紹介。検査の有用性を考察するため V-A shunt V-P shunt の検査結果とその後とられた処置の比較を試みたが、通過良好例については無処置例が多く、異常が認められた例には何らかの対処がなされた例が多く検査の信頼度が高いことが確認された。腹腔内拡散障害例 5 例を呈示し、このような例に対し診断上の注意が必要であると考察した。最後に間接的に閉塞 (主として脳室側) を知る方法として簡単に行なえる flushing device の Rebound との比較を試みたところ、これにても満足する結果を

得た。

結論：本検査は簡単迅速なシャント機能判別検査であり放射線の影響、患者の苦情、副作用が極めて少く必要とする情報をほぼ完全に得ることができる点で非常に有用である。欠点として RI 使用

による一般的欠点の他に定量的判断ができないことがあるが、この点に関し今後動態をとらえていく等のくふうが必要である。さらに腹腔内拡散障害を見逃すことなく診断するために、検査上時間をおいた撮影等の検討が必要である。